

宮城・洞ノ口遺跡

1 所在地 宮城県仙台市宮城野区岩切字洞ノ口

2 調査期間 一 第一次調査九区 一九九三年(平5)四月
 一二月、二 第一次調査一〇区 一九九四年四月
 一二月、三 第二次調査 一九九九年九月一
 二月

3 発掘機関 仙台市教育委員会

4 調査担当者 一・二 佐藤 洋・平間亮輔・佐藤 淳
 三 工藤哲司・渡部弘美・平間亮輔・吉田和正

5 遺跡の種類 城館跡・集落跡・水田跡

6 遺跡の年代 古墳時代
 近世

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(仙台)

洞ノ口遺跡は七北田川北岸の自然堤防から後背湿地にかけて立地し、標高は五〜八mである。一九九二年から土地区画整理事業、道

路建設、宅地開発などに伴う発掘調査が行なわれている。この遺跡では、自然堤防上の畑の中に細長い水田や湿地が縦横に認められ、館の堀跡が地表面で確認できる遺跡として知られていた。調査の結果、地表で認められる堀状の痕跡は実際に戦国時代の城館の堀跡であり、この城館は室町時代に造られた屋敷が発達したものであることが判明した。さらに下層では鎌倉〜南北朝時代の屋敷跡、古代の居住域や畑跡、古墳時代の水田跡などが発見された。北側の後背湿地では古代〜近世の水田跡が重層的に認められている。

第一次調査の九区と一〇区では一五〜一六世紀頃の城館から信仰に係る木製品(地藏菩薩像・四輪塔・五輪塔形板塔婆・三角形板塔婆・板碑形塔婆・柿経など)が約一六〇点出土した。このうち文字資料は城館の堀跡から出土した板塔婆四点(九区で二点、一〇区で二点)、城館内部の溝跡(一〇E-1SD8)から出土した板塔婆一三点、柿経五二点、四輪塔一点である。

多数の文字資料が出土した一〇E-1SD8は、「コ」字状あるいは方形に巡る溝跡で、この溝に囲まれた内部に小規模な納骨堂が存在した可能性がある。この遺構は一五世紀前半にまで遡る可能性はあるが、概ね一五世紀後半を中心とした年代が考えられ、一六世紀前半にはその機能は失われていたと推定される。

第二次調査では、一三世紀〜一四世紀中頃の屋敷内の土坑(SK二二)から笹塔婆が一点出土している。

なお第一次調査で出土した板塔婆で確認した文字は、いずれも墨が消えた文字の痕跡である。この文字痕跡は、その部分の色調が他の部分よりもやや薄く、わずかに盛り上がったものである。

8 木簡の釈文・内容

一 第一次調査九区

(1)  (514)×48×10 061

(2)  (332)×42×11 061

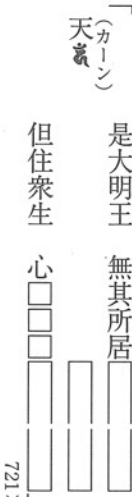
(1)(2)は竹と木で作られた枠に鉄釘で固定された五輪塔形板塔婆七本のうちの二点である。(1)は火輪の部分に「ラ」の痕跡が認められた。その他の痕跡は判読不能である。

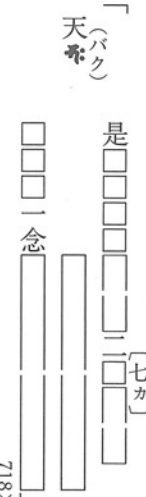
二 第一次調査一〇区

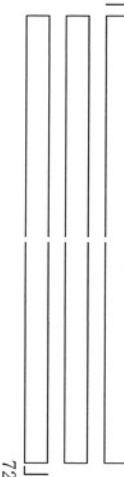
SD1005・1015
(1)  (556)×54×10 061

(2)  (432)×46×10 061

10E-SD08

(3)  721×62×11 061

(4)  718×62×11 061

(5)  720×56×14 061

(6)  720×66×10 061

(26)	〔度力〕 □□三將血勒	(167)×20×1.1	019	(38)	□□時目連	(107)×15×0.8	081
(27)	〔教力〕〔喫此時力〕 □□罪人□□□□	(97)×18×2	081	(39)	〔此力〕〔報力〕〔悲哀遂問獄主力〕 □□苦□目連□□□□	(235)×18×1	081
(28)	〔不見力〕 □□獄主□□南閻浮提□	(206)×10×1.1	081	(40)	〔教順男女敬重三寶更為阿娘〕〔持血〕 □□盆齋	(230)×20×1	019
(29)	□□閻浮提丈夫人受此苦報只見許多	(267)×21×0.9	019	(41)	重三寶更為阿娘持血盆齋三年依血盆□□	(220)×14×0.8	081
(30)	〔其力〕 □□苦惱獄□□	(43)×21×0.6	081	(42)	〔三年級力〕〔勝力〕〔請僧力〕 □□結血盆□會□□ _(ア)	(264)×17×1.2	081
(31)	只是女人產下血露觸地祖并穢汚衣裳將	(272)×19×0.9	019	(43)	□□□□□□□□	(280)×18×1.6	019
(32)	〔血露汚觸地神并穢汚衣服持去洗〕	291×20×1.1	011	(44)	一藏滿日懺散便有般若船載過奈江岸	(282)×18×0.9	019
(33)	〔去力〕 □□溪河洗翟水流汚漫□善男	287×22×1.5	011	(45)	若船載過奈河江岸看見血	(221)×19×1	081
(34)	〔不力〕 □□淨天將□割下名字□後受此	(279)×20×0.8	019	(46)	得超生仏地□說真言曰南無□	(276)×21×0.9	019
(35)	〔報力〕 〔簿中百年命終之後此苦□〕	(136)×18×0.7	019	(47)	生仏□	(67)×18×1	081
(36)	□□百年命終之□後受此苦	(166)×19×1	019	(48)	〔大力〕 □□菩薩及目連尊者啓	(241)×19×0.6	081
(37)	終之後受此苦報是時目連尊者以	(236)×20×1.6	081	(49)	尊者啓告奉勸南閻浮提人	(236)×25×1.2	019

(50)	尊者□□□□	(96)×21×1.7	081
(51)	告奉勸南閻浮是人信□□□ ^{〔善男〕}	(269)×20×1.5	019
(52)	□人信善男女早覺修取大辦 ^{〔提力〕}	(268)×17×1.3	081
(53)	会得二世母親生天上受諸快樂	(198)×25×0.8	081
(54)	命富□□□□□□□□ ^{〔貴爾時天龍八部カ〕}	(281)×17×1.3	019
(55)	轉女身成仏功德經	(251)×21×1.6	019
(56)	□□□□□□二百五十人俱舍利 ^{〔衆千カ〕}	(281)×19×0.6	081
(57)	□□敬此經受持解說礼拝	(265)×22×0.8	019
(58)	□億劫生死重罪共成道余□仏説	(166)×15×1.2	019
(59)	□量億 ^{〔劫カ〕} 生死重罪共成仏	(238)×21×1.3	019
(60)	□死重罪□□□□□□□□ ^{〔生〕〔共成佛道余 仏説カ〕}	(233)×18×0.9	019
(61)	多□□□□散髮□□□□	(226)×25×0.9	081
(62)	□□□□□□□□	(208)×20×1.2	081

(63) 順如□女□□□□□□ (203)×22×0.9 081

(64) □□□□□□ (144)×18×0.8 081

(65) □□□□^{〔此経〕〔持〕}
□□□□^{〔受文〕} (45)×(10)×1.1 081

(1)(2)は五輪塔形板塔婆で、(2)火輪・水輪・地輪の部分に「(ラカ) 義(ウーン) 碩(ケンカ)」が認められた。

(3)～(9)は木枠に鉄釘で打ち付けられたほぼ完形の五輪塔形板塔婆(七本塔婆)で、部分的であるが文字痕跡を判読できた。初七日から四九日までの供養に伴うと考えられる。(10)は破片である。(11)の四輪塔は火輪に相当する部分がないが、本来四輪であるのか、あるいは五輪塔の失敗作なのか不明である。一面に「(キヤ) 𑖦(バ)」(ア)が墨書されている。(12)(13)は頭部が三角形の板塔婆で、文字痕跡が認められた。なお、「遺構の概要」で述べたように、塔婆にはこの他に板碑形塔婆(棒状塔婆)があり、文字痕跡が確認できなかった。この今回回は割愛したが、この三種の塔婆類は一五世紀の葬送と供養のあり方を解明するための良好な資料であると考えられている。

柿経は、調査報告書に掲載した五七点のうち、文字がある程度確認できる五二点を紹介した。(14)～(42)(44)～(54)の四〇点は仏説大蔵正教血盆経(血盆経)である。血盆経は一〇世紀以降に中国で民間仏教

經典として成立したと推測されている經典で、日本には室町時代中期までに伝来し、受容されていたと考えられている。なお、55は轉女身成仏功德經、56、60、65の六点は轉女成仏經と推定される。轉女身成仏功德經については明らかではないが、轉女成仏經は法華經に關連した經典で、九世紀後半―一三世紀初頭にかけて受容されていたと考えられている。これらの柿經は、一五世紀における女人供養のあり方を窺うことのできる資料である。

三 第二次調査

(1) 南無大日如来

〔現カ〕

□ 〔現カ〕
ビラカンケン キリック

南無觀世音

南無阿弥陀仏

南無如来并

(238)×52×4 061

頭部の大部分が欠損しているが、残存する部分から類推すると三角形になっていると考えられる。

9 関係文献

仙台市教育委員会『洞ノ口遺跡―第一次・二次・四次・五次・七次・一〇次発掘調査報告書―』仙台市文化財調査報告書二八一（二〇〇五年）

（平間亮輔）

